HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	接着治療を行った垂直破折歯根の予後因子に関する後ろ向き観察研究 [全文の要約]
Author(s)	百海, 啓
Citation	北海道大学. 博士(歯学) 甲第15492号
Issue Date	2023-03-23
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89531
Type	theses (doctoral - abstract of entire text)
Note	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。
Note(URL)	https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
File Information	Kei_Dohkai_summary.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要約

学位論文題目

接着治療を行った垂直破折歯根の予後因子に関する後ろ向き観察研究

博士の専攻分野名称　　博士（歯学）　　氏名　百　海　　啓

学位論文内容の要約

歯根が垂直に破折すると，プロービングデプスが深くなり骨吸収が高度かつ急速に進行に進行する．垂直歯根破折は保存困難とされてきたが，破折した歯根を 4-META/MMA-TBB レジンセメントを用いて接着する方法で保存可能となる症例も多い．しかし，その予後は不明な点が多く，とくに予後を左右する要因については明らかになっていない．そこで本研究の目的は，垂直破折歯根の接着治療後の予後に影響する要因を，後ろ向き観察研究によって解析することである．

対象は 1995 年から 2020 年に北海道大学病院 歯周・歯内療法科にて，垂直歯根破折の診断により接着治療を行った患者を対象として，調査項目は患者背景，臨床検査，デンタルエックス線画像検査，治療内容とした．各対象歯の生存率に及ぼすこれらの調査項目の影響を，ロジスティック回帰分析により解析した．

症例数は 537 人の 686 歯で,予後不良で抜歯となったのは 115 歯であった．全症例の生存率は 1 年後 92.5%(114 症例)，3 年後 75.3%(335 症例)，5 年後 66.8%(113 症例)，7 年後 61.1%(54 症例)であった．各調査項目の生存率に対する ハザード比は，プロービングデプスが 2.702，骨レベルが 6.561，患歯が最後方の咬合接触歯であるかが 3.676 となり，95%信頼区間はそれぞれ 1.406～5.190，1.630～26.410，1.753～7.709，p 値は 0.0011，0.0011，<0.0001 であった．プロービングデプスが 3mm 以下であったり，骨吸収が見なれらなかった症例では，10 年後の生存率が 90%を超えていた．これらの結果から歯根破折時のプロービングデプスや骨レベル，最後方の咬合接触歯であるかが予後に強く影響を及ぼすことが示された．